

## 第73回応用物理学会学術講演会（2012年秋季）総論

講演会企画運営委員長 宮崎誠一\*

\*名古屋大学 大学院工学研究科

第73回応用物理学会学術講演会は、2012年9月11日(火)から14日(金)まで愛媛大学城北地区及び松山大学文京キャンパスで開催されました。四国での開催は、2005年秋の徳島大学での開催以来で、7年ぶりとなりました。参加登録者数は、5757人(学生比率は、41%)で、2011年の秋季学術講演会(山形大学)に比べて、161人の増加となりました。参加者の内訳を2011年秋と比較すると、正会員(学生を除く)は、93人の増加、学生会員が140名の増加となる一方、非会員は76人の減少でした。厳しい経済情勢、今なお続く大規模災害の影響にも関わらず、多くの応用物理学会会員の皆様に御参加いただいたことを感謝いたします。

今季講演会では、17の大分類分科と2つの合同セッションに、3401件の一般講演がプログラムされ、口頭発表:2504件、ポスター発表:897件が41の口頭発表会場と2つのポスターセッション会場で行われました。大分類分科別に投稿件数をみると、「12. 有機分子・バイオエレクトロニクス」が460件と最も多く、続いて、「6. 薄膜・表面」329件、「15. 結晶工学」314件、「14. 半導体B(探索的材料・物性・デバイス)」276件、「4. 量子エレクトロニクス」265件の順でした。近年、産業界からの投稿が低迷している「13. 半導体A(シリコン)」は、229件と投稿件数順位では6位でしたが、完成度の高い発表は健在でした。中分類分科別では、「15. 4 III-V族窒化物結晶」129件、「6. 3 酸化物エレクトロニクス」104件、「12. 11 有機太陽電池」96件と続き、聴講者数で見ると、一番人気の「12. 9 有機トランジスタ」の口頭発表セッションでは、ピーク時に190名に達し、「12. 11 有機太陽電池」、「6. 3 酸化物エレクトロニクス」、「15. 4 III-V族窒化物結晶」、「15. 6 IV族系化合物」、「17. 1 成長技術」、「プラズマ生成・制御」の6つの中分類分科のセッションで、120名を越える聴講者数となり、活発な質疑応答が交わされました。また、今回実施された22のシンポジウム(うち分科企画シンポジウム9件、一般無料公開の特別シンポジウム3件)では、特に、講演会2日目に特別シンポジウムとして開催された、SSDM 実行委員会企

画「固体エレクトロニクスの挑戦ー新しい歴史に向けて」や、現地実行委員会企画「ここまで来た酸化物材料科学:創造と成功の本質」では、会場席数を上回る約300名の聴講者数となり、大変な盛況でした。因みに、聴講者数が100人を越えるシンポジウムは、講演会初日に、特別シンポジウム「震災復興に向けて応用物理が取り組むべき技術課題」をはじめ6件あり、講演会2日目は、上記特別シンポジウムを含めて開催された4件全て、講演会3日目にも2件中1件あり、講演会開催期間中を通して、一般セッション同様にシンポジウムも充実した意見・情報交換の場となりました。

昨秋の講演会から実施されたチュートリアル(ショートコース)については、今回、講演会初日に4件(各3時間)行われ、163人の聴講(有料)があり、堅調で好評でした。今後も多様なニーズに対応できるように、チュートリアル企画の充実を図りたいと考えています。

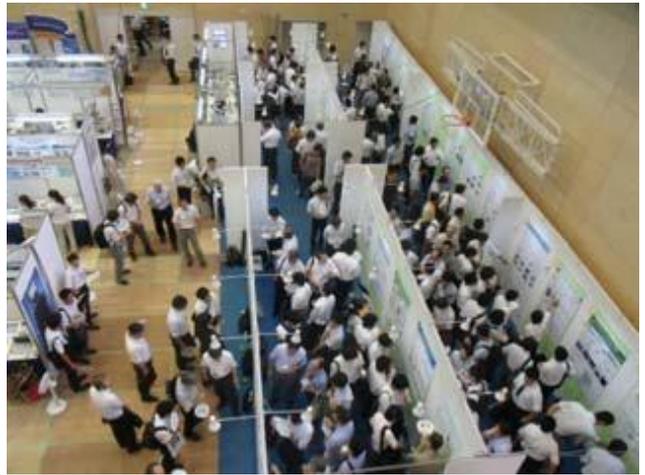
さらに、今季講演会の新企画、Optical Society of America(OSA)との合同シンポジウム(English Session)では、光学系の8つエリアで、会期4日間を通して2会場パラレルセッションがプログラムされて、合計160件の発表(内招待講演21件)が行われました。講演会2日目の朝一番に行われた、Tony F. Heinz OSA会長の特別講演「Seeing Electrons in Graphene: A Model 2-Dimensional Material」には、130人以上の聴講があり、満室で立ち見が出るほどの盛況となりました。また、今回実施された他の6つのEnglish Session(4つの中分類分科と2つのシンポジウム)においても、いずれも50人を越える聴講者数となり、活発な質疑応答がなされました。加えて、講演会初日の午前中に、国際フェローに表彰されたChun-Yen Chang先生(台湾交通大、名誉学長)、Suk-Ki Min先生(KAST、名誉フェロー)、西義雄先生(Stanford Univ., 教授)、Hans Joachim Queisser先生(Max Planck Institute for Solid State Research、名誉教授)に特別講演をしていただき、多くの参加者に本学会のグローバル展開の一旦を広報することができました。来秋の講演会では、米国 Material Research

Society との合同シンポジウムが予定され、既に 23 テーマが提案・申請されており、一段と国際色が強まった活気あふれる会合になると予測されます。

会期中晴天に恵まれたものの、連日最高気温が 34℃を越え、2つの体育館で行われたポスターセッションは、大変な暑さの中での開催となりました。それににもかかわらず、ポスターセッションは大変盛況で(写真参照)、併設の展示会場にも、延べで 4 千人を越える例年以上の来場者数がありました。講演会最終日に、春秋講演会の付設展示会に継続して 10 回以上出展していただいた企業(35 社、うち 20 回以上は 23 社)には、感謝状を贈呈し、大いに喜ばれました。しかし、暑さ対策の不十分さは否めず、今後、空調設備の整った環境でのポスターセッション、企業展示ができるようにする必要がありますと考えています。

恒例の講演会初日の夕刻に開催される懇親会は、会場から、徒歩約 15 分の市内中心部に位置する松山全日空ホテルで開催され、柳澤康信愛媛大学学長ならびに森本三義松山大学学長はじめ、約 250 名の参加者で親交を深めました。

愛媛大学と松山大学の職員を中心とした現地実行委員会による 1 年間の準備とアルバイトの学生達を含めての 4 日間と前日、前々日の現場での活躍のお陰で、全ての 행사를滞りなく進めることができました。現地実行委員長白谷祥先生(愛媛大学)、現地実行副委員長の下村哲先生(愛媛大学)、安藤孝止先生(鳥取大学)をはじめ、現地実行委員会の諸先生には厚く感謝申し上げます。また現地実行委員会顧問として全体運営にご配慮いただきました柳澤康信愛媛大学学長ならびに森本三義松山大学学長をはじめとする関係の方々に、厚く御礼申し上げます。



ポスターセッションおよび併設展示会の様子